

中部高地型櫛描文土器分布域における竪穴住居設計原理

メタデータ	言語: jpn 出版者: 駿台史学会 公開日: 2017-08-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 兼理 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/18800

中部高地型櫛描文土器分布域における 竪穴住居設計原理

佐藤兼理

要旨 南関東の弥生時代研究では、従来、土器型式ごとの分布圏から人間集団を把握する傾向が顕著であった。しかし、人間集団を土器型式だけから把握するのは適切なのであろうか。そこで本稿では、竪穴住居の属性をもとにその設計原理を検討して類型化を行った。

弥生時代後期の多摩丘陵地域には、中部高地型櫛描文をもつ朝光寺原式土器が分布している。その分布圏内に、複数の炉を持つ特徴的な竪穴住居類型が検出されるため、「朝光寺原型住居」と命名した。さらに周辺諸地域の竪穴住居の特徴を調査すると、同じく中部高地型櫛描文土器の分布域である北武蔵・佐久・上毛でも近似する構造の住居類型が見られる。これらは竪穴住居内に複数の炉を設け、その配置に特徴があることから「L・LR 複炉構造原理」と呼び、広域にわたる一連の土器型式群に特徴的な住居設計原理であると理解した。

しかし、多摩丘陵において朝光寺原式土器を出土する集落遺跡のすべてがこのタイプの竪穴住居で占められる訳ではなく、さらに三浦半島でもこのタイプの住居も散見される。また、朝光寺原式土器の消滅後もこの類型が存続する。

このように、土器型式の系統性と竪穴住居の設計原理とがうまく合致する部分と、ズレを生じる部分とがあることが確認できた。こうした場合に、人間集団の把握をどのように理解するのが適切なのであろうか。少なくとも土器型式だけで人間集団を復元することの限界性は認識すべきであろう。

キーワード：弥生時代後期, 南関東, 竪穴住居, 中部高地型櫛描文土器, 人間集団

はじめに

弥生後期の関東地方では、中期に比べて土器以外の出土する遺物が減少する傾向にある（白石・杉山・佐藤 2016）。そのため、現在に至るまで土器の型式学的な研究が中心となってきた。しかし、遺構である竪穴住居⁽¹⁾は資料数的には十分に条件を満たしているにもかかわらず、議論に上がることは少ない。竪穴住居は平面形、支柱穴の配置、炉の構造や位置、貯蔵穴の有無などいくつもの属性を備えており、様々な検討が可能である。

本稿では南関東の弥生後期の竪穴住居を型式学的に考察することで、従来土器の型式学的研究から理解されていた土器文化圏を、竪穴住居の型式学的研究から再検討を試みる

I 弥生後期における南関東の人間集団の理解

(1) 土器型式からの理解

弥生後期の南関東の土器研究史は古く、戦前に遡る。型式学的研究の出発点は、小林行雄や杉原荘介らによる様式・型式学的な研究である。彼らによって久ヶ原式土器、弥生町式土器（以下「～式」に省略）等が設定され、弥生後期の様式・型式として全国的な土器編年の中に位置づけられた（森本・小林 1939, 杉原 1940, 1943）。

特に、小林行雄は様式論の中で土器様式がある種の文化を表しているものとし、その文化の背景に対応する人間集団を想定していた（小林 1933）。結果として、その後の土器研究では土器様式・型式そのものが人間集団を表すものとして理解され、土器の分布がそのまま特定の人間集団の広がりであると想定される傾向にあった。

1970年代末になると、弥生後期の関東の土器文化圏は3つの大文化圏とその間に3つの小文化圏が位置すると理解された（田村 1979）（第1図）。前者は上毛の樽式、常陸の十王台式、そして東京湾岸のいわゆる久ヶ原式・弥生町式（以下、「東京湾岸系土器」と称す）であり、後者は下総の臼井南式、北武蔵の岩鼻式・吉ヶ谷式、そして多摩丘陵の朝光寺原式である。

多摩丘陵に分布する朝光寺原式土器は、かつては杉原荘介により「荏田式」と仮称され（杉原 1939）、1969年に岡本勇・武井則道によって型式設定された（岡本・武井 1969）（第2図）。中部高地型櫛描文⁽²⁾土器であり、常に東京湾岸系土器と共伴して出土する。

その後、松本完によって編年案が示され、新たに3つの特徴が指摘された（松本 1984）。1つ目は、東京湾岸系土器と共伴して出土するにも関わらず、同じ土器に文様が折衷することない点である。2つ目は、東京湾岸系土器は壺・甕・高坏・鉢など多様な器種が見られるのに対し、朝光寺原式はほとんど甕しか存在しない点である。最後は、時期が下るにつれて櫛描文が消失し、次第に土器自体も消滅していく点である。

1つの住居・集落から2系統の土器型式が出土するものの、土器1個体のなかに両者の文様

が共存・折衷しないことから、松本は2系統の集団の共存を想定した。さらに、器種構成からこれらの集団には優劣関係が存在し、優位な集団（東京湾岸系土器の集団）が下位の集団（朝光寺原式土器の集団）を受け入れたと想定したのである（松本1984）。

この2集団の共存とみる考え方は後の研究者にも踏襲される。浜田晋介は松本と同様に土器の器種構成に注目し、東京湾岸系土器の集団と朝光寺原式の集団は「擬制的契約関係」にあると結論づけた（浜田2000）。生業に関わる土器と考えられる壺を持たない朝光寺原式の集団が東京湾岸系土器の集団に生業面で依存し、その引き換えとして石器を供給していたと考えたのである。浜田はこれがある種の同盟関係と考えている。

このように、弥生後期の南関東・多摩丘陵では2つ系統の土器型式が存在することから、そこに2つの異なる人間集団を想定する考えが繰り返し示されてきた。

(2) 住居型式からの理解

弥生時代の竪穴住居の研究も古く、弥生土器の発見とほぼ同時期に始まる。戦前には、竪穴住居が群として捉えられるようになり、集落として解釈されるようになっていった（赤星1931）。関東では大田区久ヶ原遺跡や横浜市日吉台遺跡などで竪穴住居が数多く発見された。そして、戦前の住居・集落の研究も小林行雄によって体系的にまとめられた。小林は大田区久ヶ原遺跡の竪穴住居を柱穴の数や平面形、床面積、炉の位置などから多角的に分析し、弥生時代の人々の生活の復元を試みた（小林1938）。現在の竪穴住居の基本的な解釈がこの時期に形成されていった。

戦後になると、弥生後期～古墳前期にかけて、竪穴住居の平面形が円形から方形に変化することが注目され、古墳時代の政治的な統一と関連付けて理解されていった（和島・田中1966）。住居の平面形が社会的な関係を何かしら反映するものと考えられるようになった。

1960年代になると、南関東ではいわゆる「大形住居」に関する研究が注目されるようになる。「大形住居」の背景について首長などの有力者の住居とする説（岡本1976、小久保1977ほか）と、集会所・共同作業場とする説（関根1974、甲本1975ほか）の2つに見解が分かれて議論が行われた。特に、岡本孝之や小久保徹は南関東で弥生中期から後期に大規模な住居がみられることに注目し、「大形住居」は集落内のリーダーの住居と主張した上で、近藤義郎の「単位集団」の理論（近藤1959）とも結びつけながら集落の理解が示された。

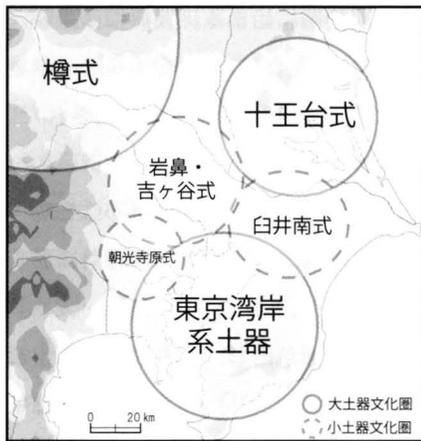
1980年代になると弥生時代の竪穴住居の研究は新たな段階を迎える。石野博信は竪穴住居の地域性に着目し、ある地域に特徴的な住居型式が他地域で検出された場合、「移住」を想定できるという考え方を示した（石野1985）。さらに、都出比呂志は全国規模で竪穴住居の構造的な分析を行った。都出は竪穴住居の炉と柱穴の配置に注目し、住居設計原理が現在の富山県域～愛知県域を境に東西で異なることを示した（都出1989）。石野や都出によって竪穴住居研

究は全国的に体系化されるようになったのである。

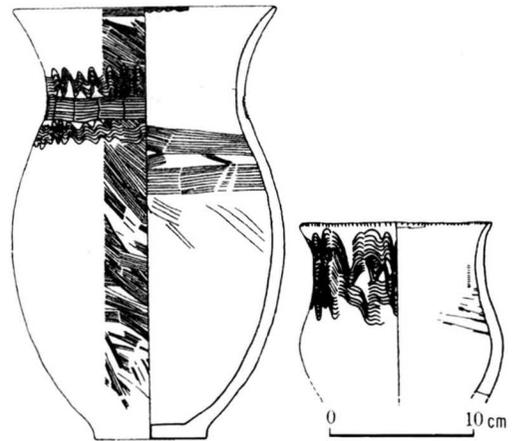
この時期の注目すべき研究として井上尚明の論文が挙げられる。井上は弥生後期の関東地方に複数の炉を持つ住居が存在することに注目し、炉の数と位置で竪穴住居を4つに類型化した。その上で、土器型式の分布と住居型式の分布がある程度重なる傾向を示すことを明らかにした(井上 1983)。特に、中部高地型櫛描文の分布域である北武蔵と多摩丘陵では住居型式でも同じ型式が分布することを明らかにした(第3図)。ただし、このように竪穴住居に地域色が表れるのは弥生後期後半以降であるという指摘もされている(笹森 1985)。

1990年代以降になると、全国的に竪穴住居の研究は少なくなる。特に、住居型式から人間集団の移動や地域色などに言及したものはほとんど見られなくなった。

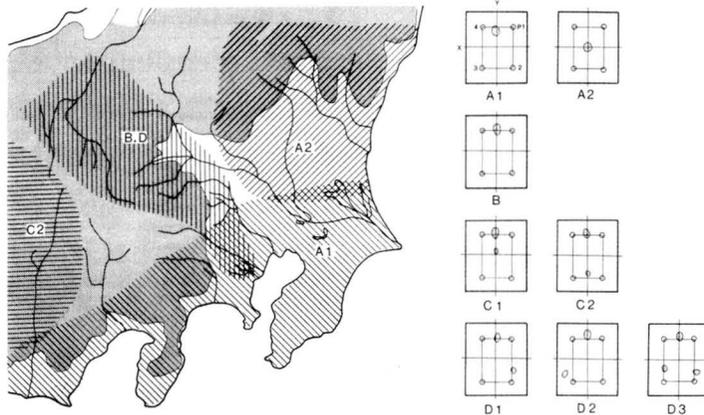
南関東の多摩丘陵では、柱や炉など竪穴住居の構造的な研究がみられた(村田 2006, 渡辺 2008, 田村 2013 ほか)。しかし、これらの研究は大形の竪穴住居の特殊性を解明しようとするものであり、70年代の「大形住居」の研究の延長線上にあると言える。



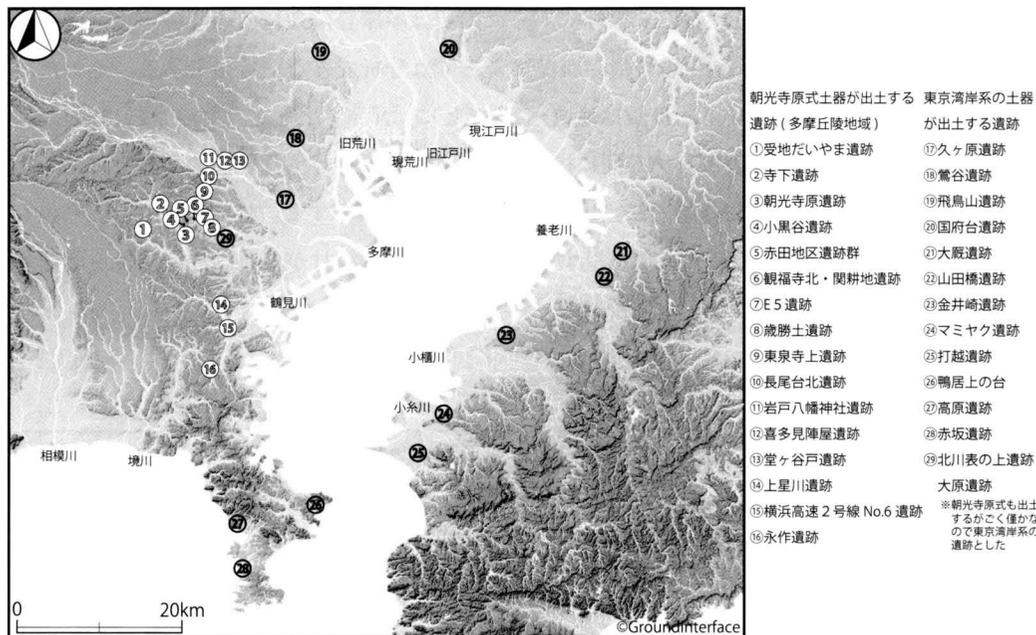
第1図 関東の弥生後期の土器型式分布圏 (田村 1979 より作成)



第2図 朝光寺原式土器 (岡本・武井 1969)



第3図 弥生後期の関東の住居型式の分類と地域性 (井上 1983)



第4図 分析対象とする遺跡

(3) 問題提起

以上から分かるように、南関東の多摩丘陵地域では東京湾岸系と中部高地系の2系統の土器が出土することから、2つの異なる集団が存在していたのではないかと考察されていた。しかし、この見解は他の遺物から検討されているわけではない。

一方で、竪穴住居と人間集団の研究は土器ほど盛んではない。特に、地域性や移動といった人間集団に結びつくような議論は1980年代をピークにほとんど見られなくなっている。これらの研究により、住居型式には土器と同様に地域性が存在していることが判明しているにも関わらず、近年では具体的な資料に基づく研究はほとんど見られない。

そこで、本論では弥生後期の南関東の竪穴住居を型式学的に分析した上で、土器型式の分布と住居型式との相関を考察していきたい。

II 南関東の竪穴住居

(1) 分析対象

弥生後期の南関東の竪穴住居を分析対象とする。ここでは便宜的に朝光寺原式土器の分布圏を「多摩丘陵」、朝光寺原式を伴わない東京湾岸系土器の分布圏を東京湾岸とする。分析対象とする遺跡は第4図に表した通り、多摩丘陵地域は16遺跡、東京湾岸地域は18遺跡である。筆者は以前、同様の分析を行っている(佐藤2016)。しかし、拙稿では対象とする住居数が少なかったため、本稿では遺跡数を増やして分析を行なった。

分析対象とする竪穴住居は総数 1671 軒である。内訳は多摩丘陵地域で 364 軒、東京湾岸地域で 1307 軒である。ただし、住居の遺存状況によっては分析できないものもある。そのため項目ごとに総数が異なっている。母数は地域・遺跡ごとに「N =」として、グラフ内に表した。

対象とする竪穴住居の代表例を第 5 図に提示する。住居構造のうち、住居の主軸上にある炉を「主炉」とし、主炉の他に住居内に設けられた炉を「副炉」とする。柱穴のうち、円形のは「円形」、楕円形ないし隅丸方形を呈するものについては板材が使われた可能性を評価して「板状柱穴⁽³⁾」とする。

(2) 分析方法

主に竪穴住居の規模と炉の数と位置、柱穴の断面形状を分析する。はじめに、住居の規模は、住居の長軸長を Y 軸、短軸長を X 軸にとり、各住居の規模分布を散布図として表す。平面形は本稿では厳密な分析は行わず、住居規模の散布図で概観を確認する程度とする。基本的に、長辺と短辺の長さの差が長辺の 1 割以上の場合は長方形タイプ、未満の場合は正方形タイプとする。

炉の数をカウントする場合 4 つ以上は一括する。炉の位置は主炉と副炉で分けて考える。主炉の位置は、主柱穴を結んだ線よりも住居の中心に位置するものを「イ」、線上に位置するものを「ロ」、線よりも壁際に位置するものを「ハ」とする（第 6 図）。

副炉の位置の分類は、先行研究の分類案（井上 1983, 渡辺 2008）（第 3 図）が示されているが、これらの分類は副炉の位置よりも数を重視したため、分類名から炉の位置情報が把握しにくい。そこで、分類をより明確化するために、炉の位置を重視した分類を採用したい。

本稿の分類は、第 7 図に示したように、主炉から遠い主柱穴のうち左側の主柱穴付近に存在するものは L タイプとし、副炉が 1 つのものを L1 タイプ、2 つ以上のものは L2 タイプとする。逆に右側の主柱穴付近に副炉が存在するものを R タイプとし、副炉が 1 つのものは R1 タイプ、2 つ以上のものは R2 タイプとする。そして、主炉から遠い主柱穴の左右両方に副炉が設けられているものを LR タイプとする。最後に、竪穴住居の主軸上に副炉が存在するものを「C タイプ」とした。C タイプの副炉については主炉からの距離に関わらず一律に C タイプとしている。

柱穴の形状は、前述のとおり「円形」と「板状」の 2 つに分類している（第 8 図）。

これらの分類を基に、住居の長軸 1m ごとに炉と柱穴の特徴をそれぞれカウントしていき、規模によって炉の数・位置、柱穴の形状がどのように変化するかを見ていく。

(3) 分析結果

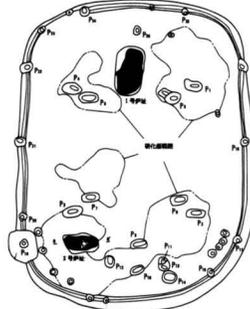
分析した結果が第 9 図である。地域ごとの様相を見ていく。まず東京湾岸は、散布図の近似直線の値が $y=1.127x-0.1014$ となり比較的平面形が正方形に近いものが多いことが分かる。住

東京湾岸の竪穴住居の例

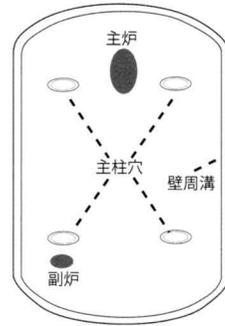


大厩遺跡 23号住居
(中村・栗本ほか 1974)

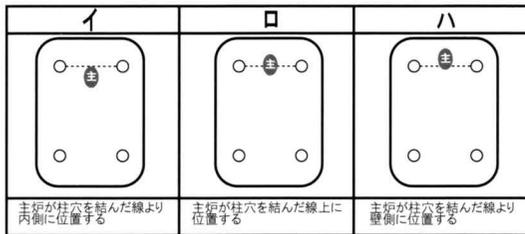
多摩丘陵の竪穴住居の例



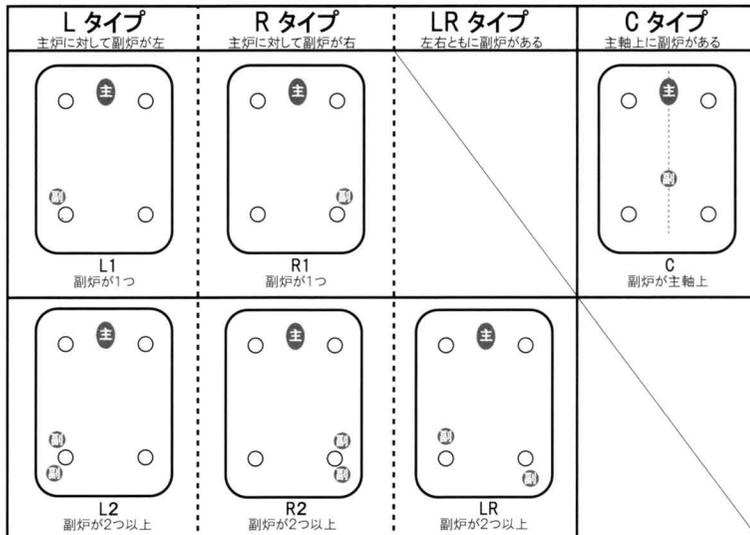
関耕地遺跡 55号住居 (田村ほか 1997)



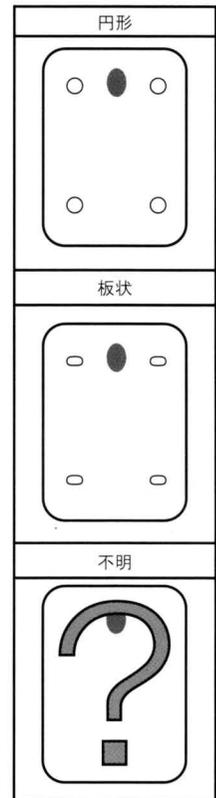
第5図 各地域の代表的な住居例と竪穴住居の各部位の名称



第6図 主炉の位置の分類案



第7図 副炉の位置の分類案

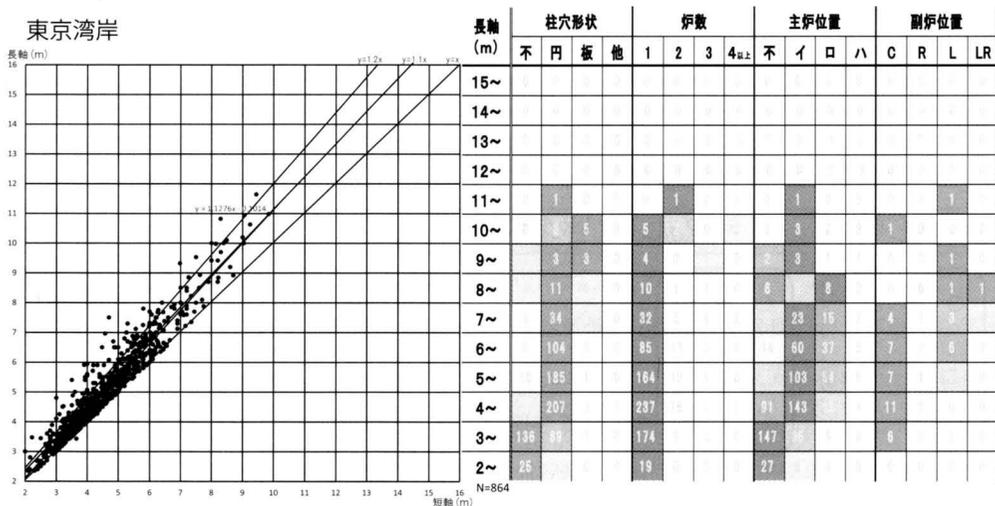
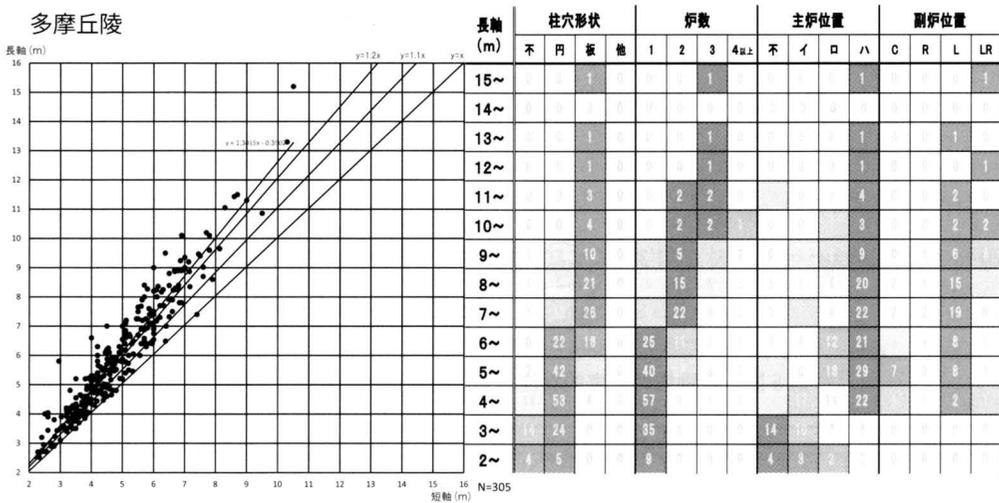


第8図 主柱穴形状の分類案

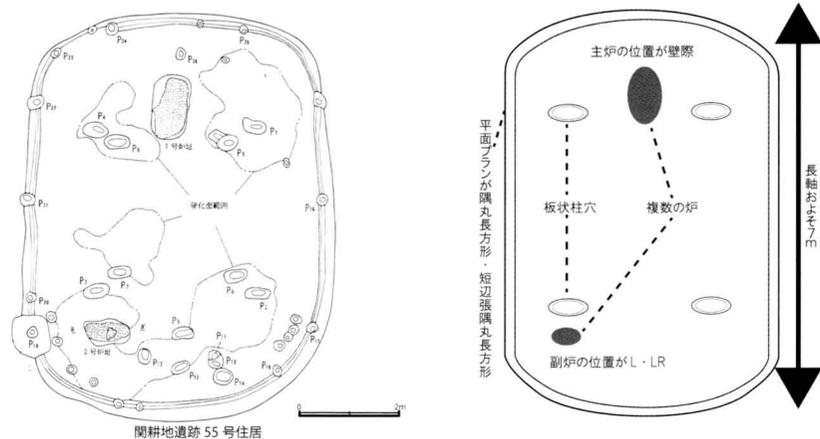
居規模では長軸 11m 台の住居が最大で、長軸が 6m 以下の住居が圧倒的に多い。

主柱穴の形状は円形が多数を占める。しかし、長軸 8m 以上では板状の割合が若干多くなり、規模が大きくなると板状柱穴が増える傾向にあることが分かる。

炉の数は基本的に1つのものが多数を占めている。規模によって炉の数に大きな違いはない。主炉の位置は基本的に住居の中心に位置する「イ」タイプが多数を占め、若干数「ハ」タイプ



第9図 多摩丘陵・東京湾岸の竪穴住居の分析結果



第10図 朝光寺原型住居の例と模式図

が存在する。こちらも規模によって主炉の位置に変化は見られない。副炉については複数の炉を持つ住居が少ないことから必然的に母数が少なくなる。位置を見てみると、長軸7m以下まではCタイプが多く見られるが、それ以上になると数自体は少ないがLまたはLRタイプの住居が見られるようになる。

以上をまとめると、東京湾岸の竪穴住居は、規模によって柱穴や副炉の位置に若干の変化はみられるものの、基本的にはどの規模であっても、平面形は隅丸正方形に近く、炉は1つで住居の中央近くに位置し、柱穴は円形であると言える。

一方、多摩丘陵では、散布図の近似直線の値が $y=1.296x-0.3414$ となり、東京湾岸に比べて長方形に近い住居が多い。特に長軸およそ6m以上では短軸の長さを1とした時の長軸の長さの比率が1.2を超えるものも多くなり、縦長の平面形を持つものが多くなる。最大で長軸15mを超える規模を持つ住居が存在し、東京湾岸に比べて規模が大きい住居の比率が大きい。

炉の数は、縦軸およそ7m以上になると複数の炉を持つ住居が増える。特に長軸10mを超えると3つの炉を持つ住居も現れ、炉の数と規模に相関性がみられる。主炉の位置は規模に関わらず、壁際に近い「ハ」タイプのものが多数を占めている。副炉の位置も規模にかかわらず、LまたはLRタイプの住居が多数を占めている。

以上をまとめると、多摩丘陵の竪穴住居は長軸およそ7mを境に様相が異なると言える。長軸7m未満の住居では平面形が正方形に近く、炉が1つとなる。一方、長軸7m以上の竪穴住居では平面形が長方形に近く、複数の炉を持つ住居が主体的になる。そして、主炉の位置は壁際に近くなり、副炉の位置はLまたはLRタイプとなる。

(4) 分析・考察

分析により、多摩丘陵と東京湾岸には共通点と相違点が見られた。まず、共通点は大形化すると板状柱穴が見られる点である。多摩丘陵では長軸およそ7m以上、東京湾岸では長軸8m以上の住居で板状柱穴が確認される傾向にある。

一方、相違点については5つ挙げられる。

- 1) 長軸と短軸の比率が異なる。第9図で示した散布図から分かるように、多摩丘陵は、東京湾岸の住居と比較して、圧倒的に長方形タイプの住居が占める割合が大きい。
- 2) 炉の数は、多摩丘陵では、東京湾岸に比べて、複数の炉を持つ住居が多く見受けられる。住居規模とも関連しており、多摩丘陵では長軸およそ7m以上は2つの炉を持つ住居が主体的になり、10m以上になると3つの炉を持つ住居も見られるようになる。
- 3) 主炉の位置は、東京湾岸では規模に関わらず、「イ」が主体的であり、基本的には住居の中心に近い位置に主炉が位置している。しかし、多摩丘陵では「ハ」が主体的となる。
- 4) 副炉の位置は、多摩丘陵の方が東京湾岸に比べて複数の炉を持つ住居の割合が多いとい

う前提条件が存在する。その上で、多摩丘陵の副炉はLやLRタイプといった、主軸に対して必ず左側に副炉を設置するものが圧倒的に多くを占め、規則性がみられる。

- 5) 柱穴形状は共通点の部分でも触れたが、相違点としては円形と板状の割合の違いが挙げられる。多摩丘陵では長軸がおよそ7mを超えると板状柱穴の割合が大きくなり、過半数を占める。基本的に東京湾岸では円形柱穴が主流である。

以上のことから、多摩丘陵と東京湾岸の住居では共通点よりも相違点が多いことが注目される。遺跡の位置にもよるが、多摩丘陵と東京湾岸の距離は約10kmと隣接する地域にもかかわらず、住居の規模・内部構造に明らかな違いみられる。このことから、両者の違いを住居型式の違いと判断することができる。

(5) 住居の類型化 - 朝光寺原型住居の提唱 -

分析結果をもとに多摩丘陵の竪穴住居の特徴を整理すると、多摩丘陵と東京湾岸の住居の違いが顕著に現れてくるのは、長軸およそ7m以上の住居であることが分かる。そこに焦点を当てて整理していくと以下の①～⑥の特徴を挙げることができる。

特徴①： 長軸がおよそ7m以上。

特徴②： 複数の炉を持つ。

特徴③： 主炉が「ハ」（壁側に近い）の位置にある。

特徴④： 副炉がLまたはLRタイプ（主軸に対して左側または両側）に位置する。

特徴⑤： 主柱穴が板状柱穴である。

特徴⑥： 平面形が隅丸長方形ないし短辺張隅丸長方形を呈する。

研究史上、特徴②～⑤は朝光寺原式土器を伴う住居の特徴としてもっとも多く指摘されてきた点である（井上1983, 渡辺2008, 田村2013）。しかし、従来の研究では経験的な指摘をするものが多く、具体的な数値を出して示すものは少なかった。

今回新たな資料を追加し、具体的に分析をしても、これらの特徴が明確に現れることが確認できた。さらに、長軸およそ7m以上からこのような特徴が明確に見られる点や、住居の平面形が隅丸長方形ないし短辺がやや張り出す「短辺張隅丸方形」の住居が多い点は今回の分析を通して明らかになった点である。

以上のことから、①～⑥の特徴を持つ住居を「朝光寺原型住居」として一つの住居類型を提唱する（第10図）。ただし、特徴①については必ずしも長軸7m以上である必要はなく、②～⑥の条件を満たしていれば「朝光寺原型住居」とみなす。あくまで②～⑥の特徴が顕著に見られるのが長軸およそ7m以上のため、このような条件を補助的に加えた。

この朝光寺原型住居は他地域にはない特徴をもち、朝光寺原式土器と密接な関係をもつことから、朝光寺原式土器を使用した集団が生活を営んだ住居とみなせるため住居型式として提唱

した。前稿で、筆者は朝光寺原式土器の系譜を評価して「朝光寺原系住居」と提唱した（佐藤 2016）。しかし、土器のように文様がない住居では系譜関係を追うことは難しいため、より中立的な意味合いの「類型」として捉え直し、朝光寺原型住居とした。

Ⅲ 朝光寺原型住居の成立過程

ここでは、朝光寺原型住居がどのような過程を経て出現するのかを明らかにしてきたい。そのために、土器編年をもとにした住居の変遷を概観する。本題に入るまえに、この変遷の性質について触れておきたい。ここで示すのはあくまで変遷であって竪穴住居の各属性を基準とした編年ではない。出土土器を住居の時期の目安を示しているため、時期を区切る線上に住居を配置する場合もある。これは、土器と住居で型式が変化するサイクルが異なるためである。

分析の対象とする竪穴住居は横浜市観福寺北・関耕地遺跡の資料を中心とする。この遺跡は朝光寺原式土器と朝光寺原型住居がもっとも多く出土するため選択した。分析する遺跡をなるべく1つに絞ることで、1つの集落における住居の変遷を捉えることが目的である。ただし、この遺跡では古い段階の資料が少ないため、適宜周辺の遺跡から資料を追加した。

変遷の基準とする土器編年は、田村良照の編年を採用した（田村 2013）。現在、最も新しい資料含んで網羅的に編年が組まれている点と、従来の編年と明確に対比できる点が採用理由である。

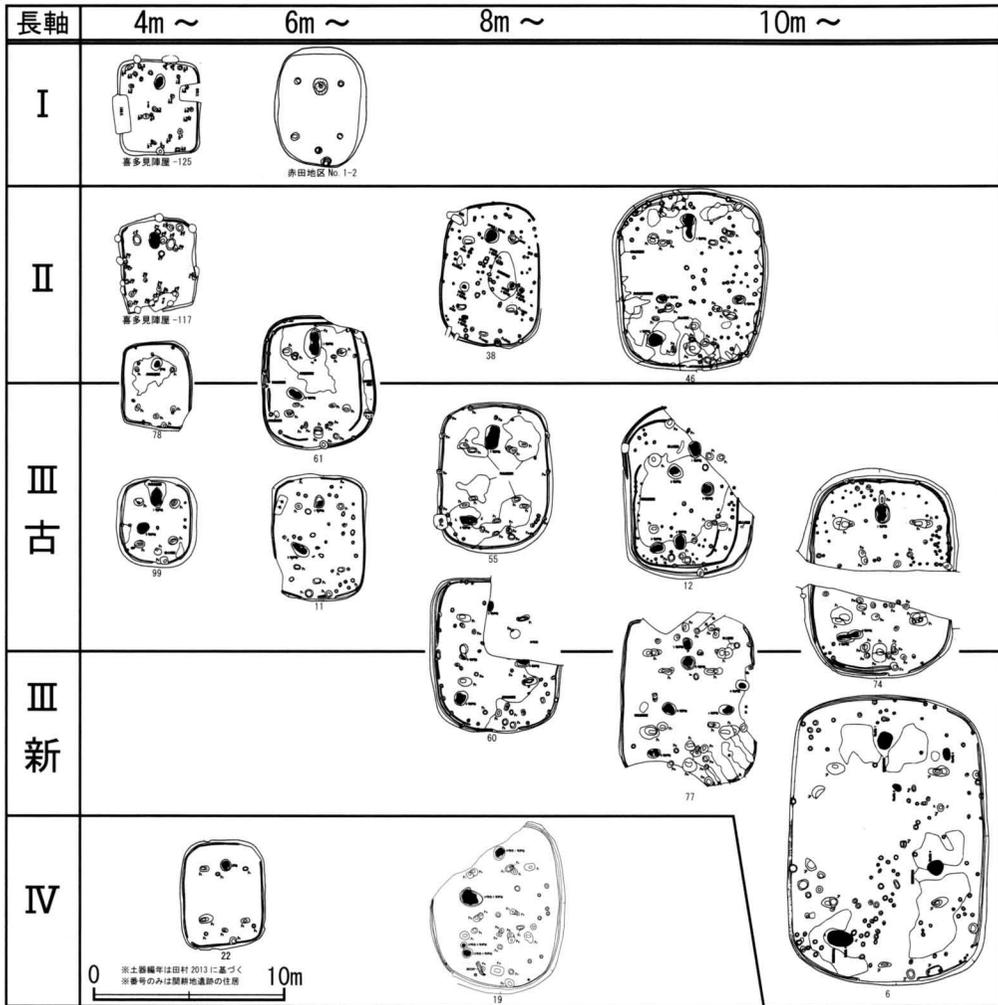
この編年を基に変遷を示したものが第11図である。変遷図から、朝光寺原型住居が出現するのはⅡ式期の段階であり、Ⅲ式期以降住居が巨大化し、副炉の数も増えていくことが分かる。

一方、朝光寺原型住居が成立する以前のⅠ式期は、小判形と隅丸方形の2つのタイプの竪穴住居が存在する。これを検討するには弥生中期後葉の竪穴住居と比較する必要がある。

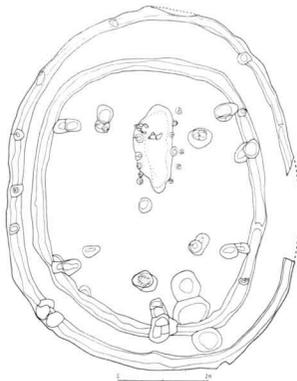
小判形の平面形をもつ竪穴住居は弥生中期後葉の南関東で一般的に見られる住居である。この時期の最大規模を誇る集落遺跡である横浜市折本西原遺跡でも8割以上の竪穴住居が小判形の平面形である（第12図）（石井ほか1980、岡田・水沢ほか1988）。これらの住居は炉が住居の中央にあり、壁周溝をもち、比較的大きな住居には板状柱穴がみられる（村田2006）という特徴がある。

一方、隅丸方形の平面形をもつ竪穴住居は弥生中期後葉の南関東にも見られるが、ごく僅かである。弥生中期後半にこのような住居が一般的に見られるのは中部高地である。弥生中期後葉の中部高地で中心的な集落遺跡である長野市松原遺跡では約半数の住居が隅丸方形である（第13図）（青木ほか1999）。これらの住居は炉が壁際に近く、南関東の住居ほど壁周溝を持たないことが特徴として挙げられる。

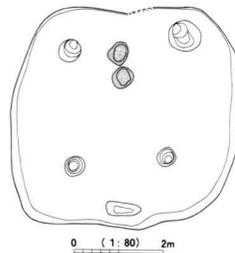
以上から、朝光寺原Ⅰ式期には、弥生中期後葉の南関東と中部高地の特徴に由来する持つ2つのタイプの竪穴住居がそれぞれ存在していたことが分かる。これらの竪穴住居がⅡ式期にな



第 11 図 多摩丘陵の竪穴住居変遷図

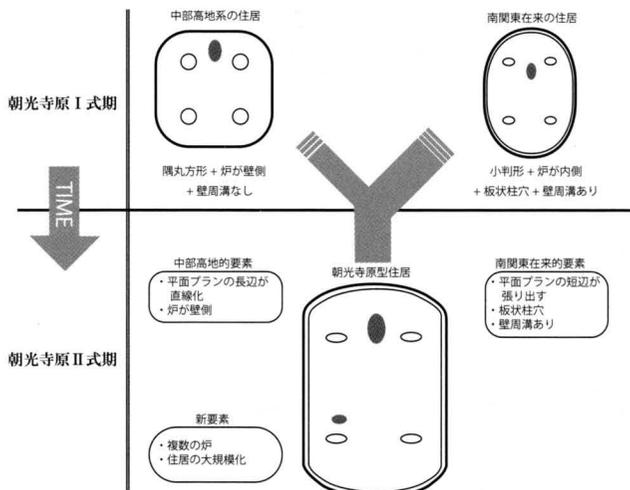


第 12 図 横浜市折本西原第 40 号住居 (石井ほか 1980)



第 13 図 長野市松原遺跡第 323 号住居 (青木ほか 1999)

ると姿を消し、朝光寺原型住居が出現する。朝光寺原型住居の特徴を見ると、特徴③・⑥は中部高地の特徴、特徴⑤と壁周溝⁽⁴⁾をもつことが南関東在来の特徴と同じ性質のものと考えることができる。これらの状況をみると、朝光寺原型住居は中部高地的な要素と南関東在来の要素が融合して成立した可能性が考えられる（第14図）。複数の炉を持つ特徴②については朝光寺原型の新要素として追加されると考えられる⁽⁵⁾。



第14図 朝光寺原型住居の成立過程

それでは、この複数の炉は何と関係するのか。朝光寺原式土器と同様に中部高地型櫛描文をもつ土器の分布域の竪穴住居と比較しながら考察していきたい。

Ⅳ 中部高地型櫛描文分布域の竪穴住居

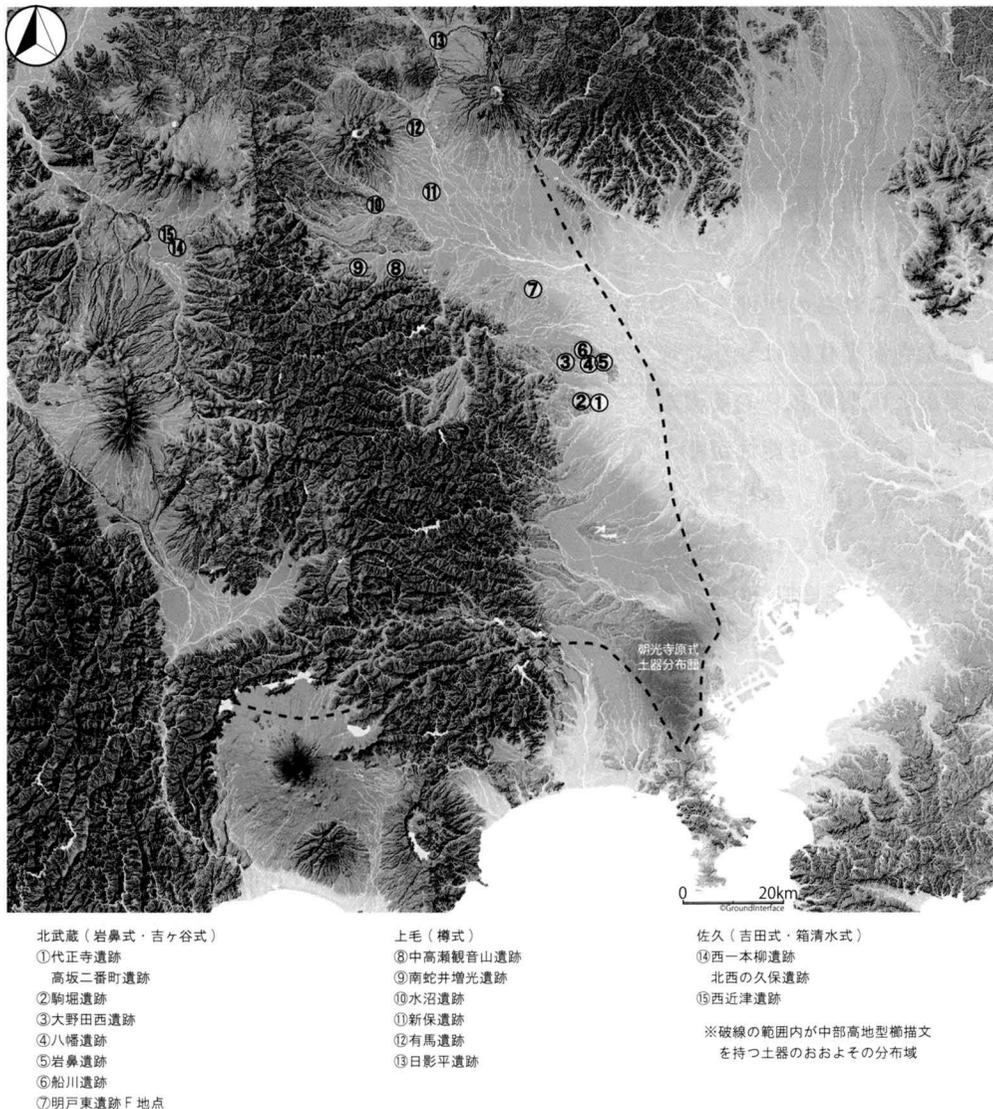
(1) 中部高地型櫛描文の分布域

中部高地型櫛描文をもつ土器は中部高地を中心に上毛・北武蔵・甲府盆地・南関東に分布する。これらのうち、弥生後期において竪穴住居の数が分析に耐えられる数的条件を満たしている地域は佐久・上毛・北武蔵である。ここでは、この3地域の遺跡（第15図）から検出された竪穴住居を南関東と同様に、規模と柱穴の形状、炉の数と位置について分析を行い、各地域を比較していく。

(2) 北武蔵・上毛・佐久の竪穴住居の比較

各地域の分析結果が第16図である。各地域の分析結果をまとめていくと、まず、北武蔵は、もっとも母数が少ない点に留意する必要がある。その上で分析結果を見ていくと、住居の短軸を1としたときの長軸の比率の平均は約1.38と比較的縦長の平面形である。次に柱穴には長軸およそ9m以上で板状柱穴が見られる。炉の数は長軸およそ6m以上で複数の炉を持つものが現れ、主炉は「ロ」・「ハ」の位置、副炉の位置はL・LRタイプの位置が一般的である。

上毛はもっとも母数が多い地域である。住居の短軸を1としたときの長軸の比率の平均は約1.30とこちらも比較的縦長の平面形である。柱穴形状は規模にかかわらず円形のものが多い。炉の数は長軸およそ7m以上で複数の炉を持つものが現れ、主炉は「ハ」の位置、副炉の位置



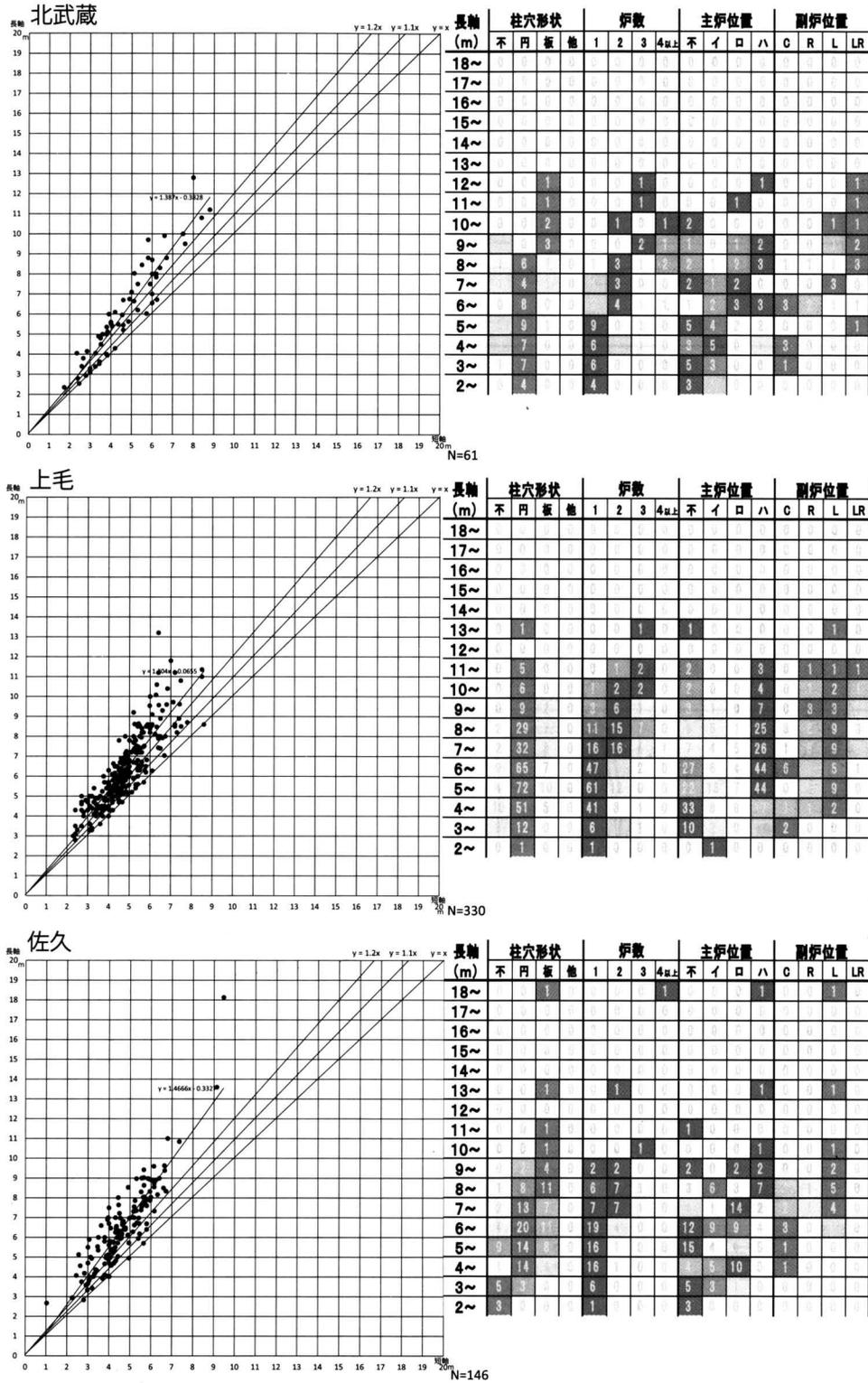
第 15 図 北武蔵・上毛・佐久の分析対象の遺跡分布図

は若干 R タイプのものも見られるが、L・LR タイプの位置が一般的である。

佐久地域は、遺跡数は少ないものの、扱う遺跡はすべて大規模な集落遺跡であるため、この地域の特徴をよく捉えることができる。住居の短軸を 1 としたときの長軸の比率の平均は約 1.47 とこちらも縦長の平面形である。長軸およそ 8m 以上では板状柱穴が見られる。炉の数は長軸およそ 7m 以上で複数の炉を持つものが現れ、主炉は「口」・「ハ」の位置、副炉の位置は L タイプの位置が一般的である。

以上の分析結果から、この 3 地域の弥生後期の竪穴住居は平面形や主炉の位置、柱穴形状に若干の違いは見られるものの、長軸およそ 7m 以上の住居では複数の炉を持ち、副炉の位置も

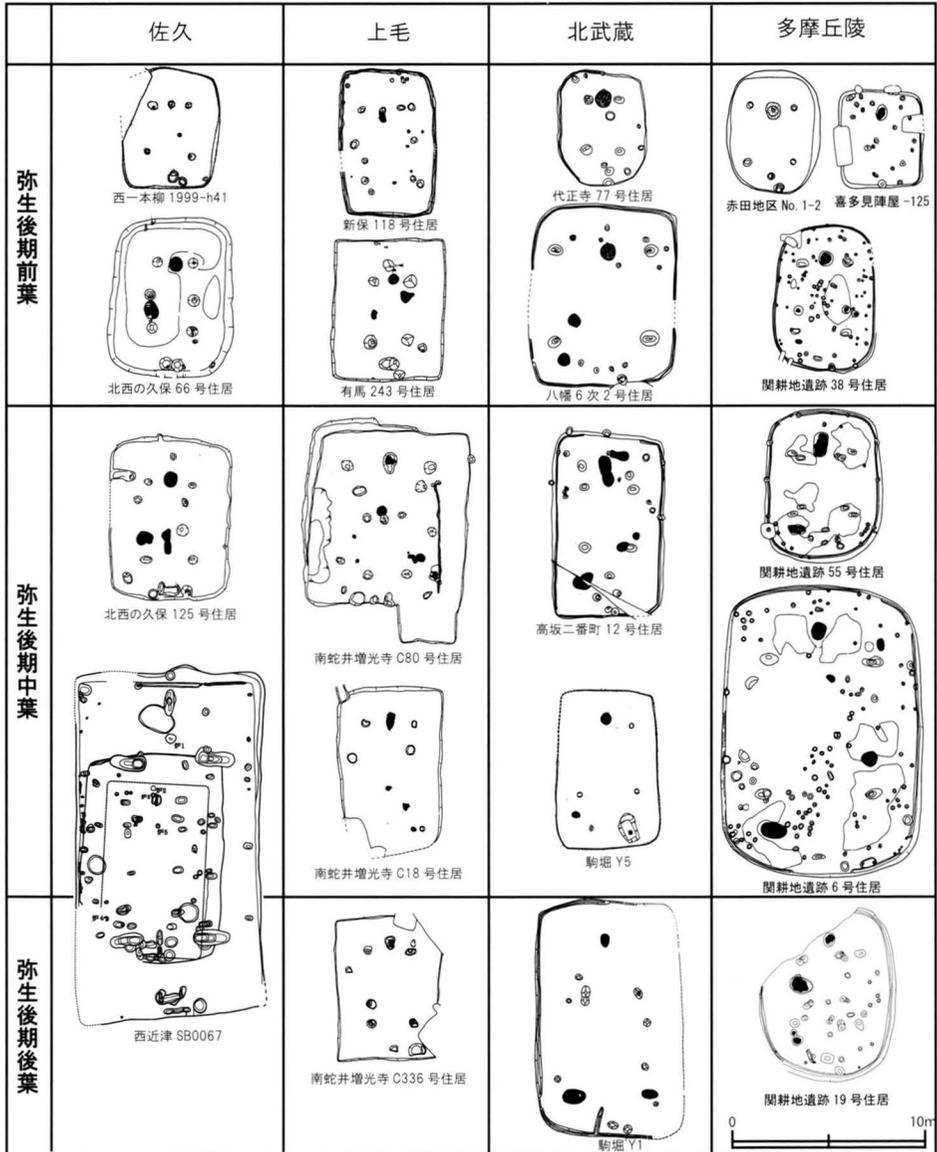
中部高地型橢圓土器分布域における竪穴住居設計原理



第 16 図 北武蔵・上毛・佐久の分析結果

第 1 表 中部高地型櫛描文分布域と東京湾岸の弥生後期土器編年対応表

地域	佐久	南蛇井増光寺	上毛	北武蔵	多摩丘陵	東京湾西岸	房総
編年案	小山2014	大木1997	若狹2007	柿沼1982,2015	田村2013	古屋2013	大村2004a
後期前葉	佐久1		樽1	岩鼻1	朝光寺原Ⅰ	北川谷1期	久ヶ原1
	佐久2			岩鼻2	朝光寺原Ⅱ	北川谷2期	久ヶ原2
				岩鼻3			
後期中葉	佐久3古	1	樽2	吉ヶ谷1古	朝光寺原Ⅲ古	北川谷3期古	山田橋1
	佐久3新	2		吉ヶ谷1新	朝光寺原Ⅲ新	北川谷3期新	山田橋2古
後期後葉		3古	樽3	吉ヶ谷2古	朝光寺原Ⅳ	北川谷4期古	
	佐久4古	3新		吉ヶ谷2新		北川谷4期新	山田橋2新
	佐久4新	4					



第 17 図 北武蔵・上毛・佐久・多摩丘陵の住居変遷図

L・LR タイプの位置が一般的であるという住居設計原理に共通点がある。複数の炉を持つことを評価して、便宜上、このような住居設計原理を仮に「L・LR 複炉構造原理」と称する。

ここで、このL・LR 複炉構造原理は、朝光寺原型住居の特徴の①②④と同義であり、多摩丘陵地域にもこの住居設計原理が存在していることが分かる。

(3) 中部高地型櫛描文の分布域の竪穴住居の変遷

次に、このL・LR 複炉構造原理がどのような過程を経て成立するかを見ていきたい。これについても、土器編年をもとに住居の変遷を概観する手法をとる。多摩丘陵の変遷と同様に、ここで示すのもあくまで変遷であって竪穴住居の各属性を基準とした編年ではない。

基準とする土器編年は以下の通りである。岩鼻・吉ヶ谷式（北武蔵）については柿沼幹夫らによる編年（柿沼 1982, 2015, 2016）を採用した。樽式（上毛）については若狭徹による編年（若狭 2007）をもとに大木紳一郎の編年（大木 1997）を補足的に活用した。吉田・箱清水式（佐久）の編年は小山岳夫の編年（小山 2014, 2016）を採用した。最後に、多摩丘陵の編年は前述したように田村良照の編年（田村 2013）を採用した。各地域の土器編年の並行関係の整理には、西相模考古学会と古屋紀之がまとめた広域編年（古屋紀之ほか 2015）を基に、各地期の対比を行った。しかし、各地の土器編年の並行関係を整理することは非常に難しく、必ず各所に「ズレ」が生じてしまう。特に後期初頭の段階は各地域ともに土器型式の交流が少なく、並行関係を見ることは難しい。そこで本稿では住居の変遷を大まかに取らえるという観点から、後期を前葉・中葉・後葉の3つの段階に大きく区切って整理をした。各地域と時期との対応関係は第1表ようになる。

この時期区分に基づいた変遷が第17図である。これを見ると、弥生後期前葉にはどの地域もL・LR 複炉構造原理は見られない。しかし、どの地域も後期前葉の後半段階にL・LR 複炉構造原理が出現し、後期中葉には住居が大規模化しL・LR 複炉構造原理が定着、そして後期後葉段階になっても後期中葉の様相が継続する。つまり、弥生後期の北武蔵・上毛・佐久・多摩丘陵という中部高地型櫛描文の分布域内では、竪穴住居は類似した変遷過程を示すのである。

(4) 小結

以上のように、中部高地型櫛描文分布域の竪穴住居は、L・LR 複炉構造原理という共通する住居構造原理を持つ。さらに、竪穴住居の変遷を比較しても共通した変遷過程をたどることが分かった。すなわち、中部高地型櫛描文の分布域では、土器型式だけでなく、住居型式においても強い共通性があると言える。ここから、中部高地型櫛描文土器を使用した人間集団はL・LR 複炉構造原理をもつ竪穴住居への志向性が強いと考察できる。

V 南関東におけるL・LR 複炉構造原理を持つ住居

(1) 土器型式と住居型式からみる多摩丘陵の人間集団

これまでの分析で、L・LR 複炉構造原理は中部高地型櫛描文土器を使用した人間集団と強い結びつきがあることが確認できた。すなわち、多摩丘陵においては朝光寺原型住居を使用する集団が朝光寺原式土器も使用していたと考えられる。この集団を集団 A とすると、従来は集団 A の存在は朝光寺原式土器が出土することのみで判断してきた。ところが、先述したように朝光寺原式土器は時期が下るに従って姿を消していく。このため、朝光寺原式土器が消滅した段階には集団 A が存在しないことになってしまう。

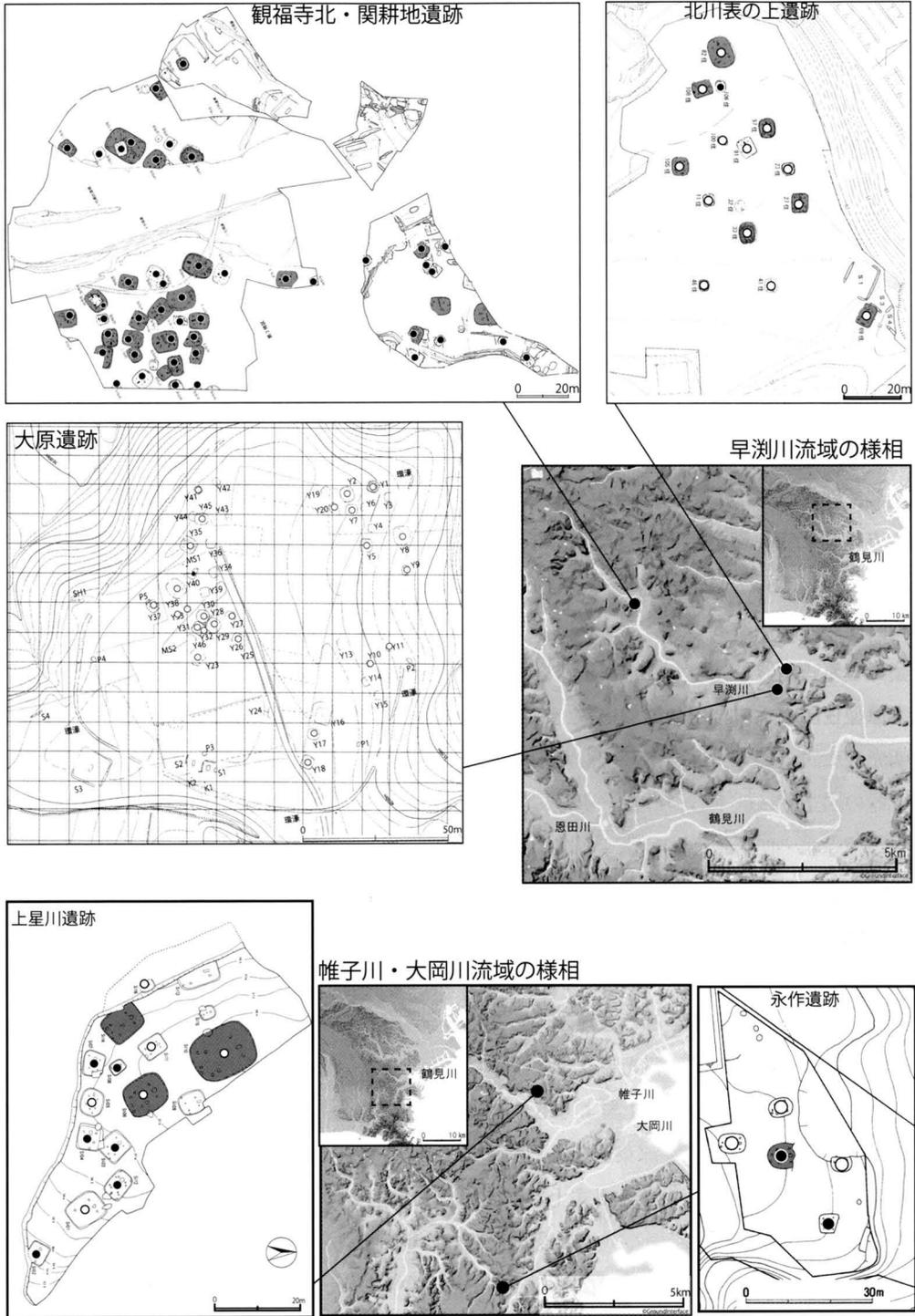
しかし、本稿で示した朝光寺原型住居という住居型式は存続している。この点をどのように理解するべきであろうか。朝光寺原式土器とこの住居型式の強い結びつきを重視するならば、住居型式からも集団 A を把握できるのではないか。実際の集落遺跡を土器型式と住居型式の2つの観点から見たい。その対象として、朝光寺原式土器の分布の境界に位置する早淵川流域と帷子川・大岡川流域の2つの地域の様相を分析する（第18図）。土器型式は、朝光寺原式土器が東京湾岸の土器と常に1つの住居内で相伴して出土するという特徴がある。よって、朝光寺原式土器が出土する住居と東京湾岸系土器のみが出土する住居の2つに分類し、各遺跡の全体図にある住居跡それぞれをマークした。判断対象とした土器は床面直上かそれに準ずる出土状況の土器のみとした。住居型式については、朝光寺原型住居にトーンをかけている。

はじめに、早淵川流域を取り上げる。この地域には、上流に朝光寺原式土器の資料が最も多く出土している観福寺北・関耕地遺跡があり、下流の方には横浜市北川表の上遺跡と同市大原遺跡が位置する。観福寺北・関耕地遺跡では、ほぼ全ての住居で朝光寺原式土器が確認され、住居でも全体の半数以上が朝光寺原型住居となっている。土器型式からも、また住居型式からも、集団 A の存在を設定できる。次に、大原遺跡ではどうであろうか。この遺跡は観福寺北・関耕地遺跡と対照的な様相を示す。土器型式では朝光寺原式土器は出土していない。住居型式の点でも、朝光寺原型住居は存在しない。よって、大原遺跡には集団 A が存在したとは考えられない。

北川表の上遺跡は大原遺跡から北におよそ1km弱と非常に近い距離に位置し、土器型式から見ると、東京湾岸系土器が圧倒的に多く、朝光寺原式土器がほとんど出土していない。しかし、住居型式から見ると、ほぼ半数が朝光寺原型住居である。しかも、それらの住居跡から出土する土器の中に朝光寺原式土器は存在しない。土器型式と住居型式が他の2遺跡のように対応しない。よって、このような場合、土器型式からみれば集団 A は存在しなくなるのに対し、住居型式からみれば存在することになる。

より南方の帷子川・大岡川流域を見てみる。横浜市上星川遺跡では朝光寺原式土器が出土する住居跡と東京湾岸系土器のみが出土する住居跡はほぼ同数である。住居跡をみると全体16軒のうち3軒が朝光寺原型住居であり、そのうち2軒については東京湾岸土器のみが出土している。北川表の上遺跡と同様に土器型式と住居型式は一致しない。この遺跡も住居型式から集

中部高地型櫛描文土器分布域における竪穴住居設計原理



第 18 図 朝光寺原式土器分布圏における土器型式と朝光寺原型住居の分布

団 A を確認できることになる。横浜市永作遺跡は現在朝光寺原式土器が確認されている最南端に位置する。この遺跡では、全 5 軒の住居跡のうち朝光寺原式土器が出土する住居跡が 2 軒存在する。しかし、どちらの住居跡も甕が 1 点ずつ確認されるのみで、ほとんどが東京湾岸系の土器である。土器型式から見ると、朝光寺原的な要素はあまり強いとは言えない。一方で、住居跡をみると、1 軒ではあるものの Y-4 号住居跡⁽⁶⁾が朝光寺原型住居として確認できる。さらに、この住居からは朝光寺原式土器が検出されている。すなわち、最南端であっても土器型式と住居型式の両方から集団 A を確認できる。以上のような事実をどのように理解すればよいであろうか。

(2) 土器型式と住居型式と集団

もう一度、問題を整理して考察する。まず土器型式である朝光寺原式土器は中部高地系である。ところが、同じ中部高地系土器の樽式や岩鼻式がそれ単純に一集落の土器群を構成するのに対し、朝光寺原式土器は東京湾岸系土器と共存するのが一般的である。

一方、朝光寺原型住居は先行する宮ノ台期の住居（小判型 + 壁周溝 + 板状柱穴）を継承しつつ、中部高地系の住居と共通する属性（炉が壁側、L・LR 複炉）も合わせもつという系統の複合・折衷性がある。

朝光寺原式土器も住居も豊富な資料をもつ観福寺北・関耕地遺跡では、朝光寺原式土器と朝光寺原型住居が強く結びついている。このことが非常に重要である。

朝光寺原式土器分布圏の東縁にあたる北川表の上遺跡でも、南縁の永作遺跡でも、朝光寺原式土器の出土率は低下しつつも、明確に朝光寺原型住居は存在する。この状況を理解するために、観福寺北・関耕地遺跡と強く結びつく集団の存在を仮定する必要がある。

観福寺北・関耕地遺跡一帯である朝光寺原式土器分布圏の中核的地域においても、土器は中部高地系と東京湾岸系の 2 系統が分離・独立しながらも共存する。しかし、住居構造の上では、2 系統が折衷して 1 つの住居型式を構成している。この土器と住居に表れた 2 系統の存在状態 = 構造が人間集団を判断するのを難しくしている。

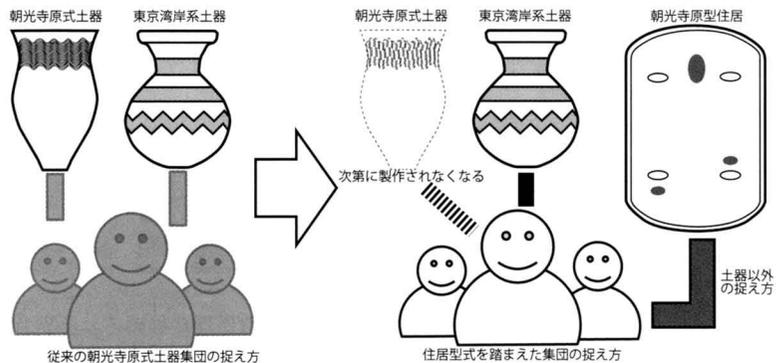
多摩丘陵の縁辺地域では朝光寺原式土器の存在が希薄な遺跡（集落）においても、朝光寺原型住居が存在する。本稿では土器よりも住居の方に中部高地系の折衷・定着度が高いことを重視して、集団 A を「朝光寺原集団」と理解したい。

このような状況から、朝光寺原式土器がないことが、そのまま集団 A が存在しないことに結びつくわけではない。土器型式では認識できない場合であっても、住居型式からみれば存在を示せるのである（第 19 図）。すなわち、弥生後期中葉以降、朝光寺原式土器が製作されなくなったとしても、集団 A が存在した可能性がある。

なお、朝光寺原式土器と密接に関係する住居型式を「朝光寺原」型住居と同じ名称で呼ぶことには十分な注意が必要である。土器型式と住居型式とは各々独立しており、相互の関係を検

中部高地型櫛描文土器分布域における竪穴住居設計原理

討するためにも、混同を防ぐ意味から住居型式を「観福寺北・関耕地型」と呼ぶべきかもしれない。しかし、それでは土器型式と住居型式に表れた中部高地系と在来＝東京湾岸系の2



第19図 集団の捉え方の変化

系統の重なりの問題に対して注目度が弱まる恐れがある。そこで、本稿ではあえて土器型式と同様に朝光寺原型住居と呼んだ。この問題については引き続き検討を重ねたい。

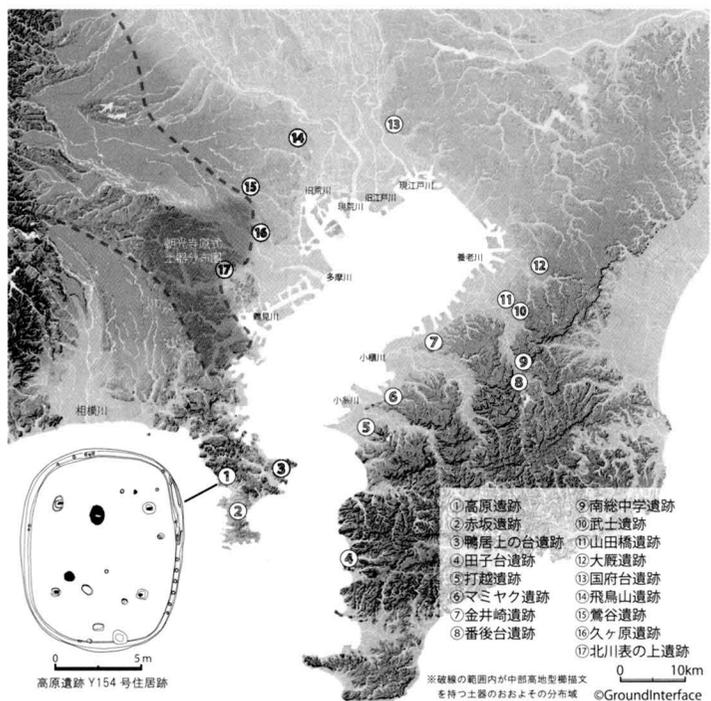
(3) 中部高地型櫛描文分布圏外のL・LR複数構造原理を持つ竪穴住居

最後にさらに踏み込んで、南関東で中部高地型櫛描文分布圏外の地域にL・LR複数構造原理を持つ竪穴住居が存在するのを見ていく。

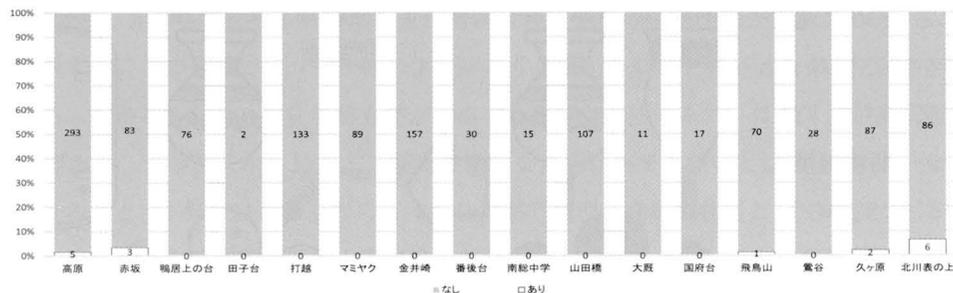
分析の対象とするのは東京湾岸を囲む①～⑱の遺跡である(第20図)。これらの遺跡の竪穴住居でL・LR複数構造原理が見られるものについては第21図に示した。結果として、先述した北川表の上遺跡以外の地域では、ほとんど見られないことが判明した。

しかし、三浦半島にはごく僅かではあるが存在している。特に、横須賀市高原遺跡 Y154 号住居跡では明確にL・LR複数構造原理をもつことが分かる。この状況から、三浦半島に多摩丘陵または中部高地と何らかの関係がある集団が存在した可能性を指摘したい。

弥生後期の三浦半島については、杉山浩平によ



第20図 対象とする遺跡



第 21 図 L・LR 複炉構造原理が検出される割合

て中部高地または多摩丘陵から金属製釧が流通した可能性が示唆されている（杉山 2014）。弥生後期になると、三宅島の噴火により、弥生中期まで流通していた伊豆諸島産の貝輪の供給がストップし、結果、三浦半島も中部高地や東海からの金属製の釧の流通圏にシフトするという。現段階ではこれ以上詳しくは言及できないが、このような状況証拠から中部高地と何らかの関わりのある集団が三浦半島まで分布していたと想定できる。

おわりに

本稿では、弥生後期の多摩丘陵の竪穴住居を中心に分析し、そこから見える人間集団について言及した。これまで土器型式から把握されていた人間集団であるが、住居型式から見ることで、従来とは異なった集団を示すことができた。

しかし、本論で示した集団論は論理的に未熟な点も多々見受けられる。特に、土器型式と人間集団について言及するには、土器の製作技法的な研究を行うなど、土器の面からもより詳細な分析を必要とする。今後の課題としていきたい。

本稿を執筆するにあたって多くの方にお世話になった。日頃からご支援・ご指導を賜っている石川日出志先生をはじめ、駿台史学で執筆する機会を与えて頂いた阿部芳郎先生、安蒜政雄先生、佐々木憲一先生、藤山龍造先生には、授業や研究発表の場で貴重な御指導・御助言を賜った。また、植田雄己、尾崎沙羅、柿沼幹夫、久米美夏、佐藤里香、白石哲也、杉山浩平、杉山祐一、土井翔平、根本岳史、別所鮎実、の諸氏には様々な意見を賜った。資料の実見に関しては、神奈川県教育委員会の井澤純、綾瀬市教育委員会の井上洋一、横浜市埋蔵文化財センターの橋本昌幸、古屋紀之、高橋健、群馬県埋蔵文化財事業団の関根晴彦、洞口正史、熊谷市教育委員会の松田哲の諸氏にお世話になった。感謝を申したい。

最後になるが、筆者に大学院で研究する機会を与えていただいた川崎市教育委員会、並びに川崎市立富士見中学校の諸氏に感謝の意を表したい。

注

- (1) 竪穴住居は、近年、住居ではない可能性も考え「竪穴建物」と表記する場合がある。しかし、本稿では日常生活の場である可能性を評価して、一律に「竪穴住居」と表記する。
- (2) 中部高地型櫛描文は断絶しながら右回りに施文される弥生土器の櫛描文施文方法の1つである。佐原眞によって類型化された(佐原1959)。中部高地を中心に分布する栗林式土器や箱清水式土器に見受けられる。
- (3) 板状柱穴を村田文夫は五平(状)柱と称している(村田2006)。しかし、五平柱は江戸時代の建築用柱材であり、弥生時代の竪穴住居とは文化的な継続性を想定し難い。本稿では板状の柱材を用いたことを評価して一律に「板状柱穴」とする。
- (4) 壁周溝はその遺跡の地質的な環境や調査精度によって検出されるかどうかが大きく左右される。しかし、多摩丘陵の竪穴住居には良く見られるため付加的な特徴として追加した。
- (5) 複数の炉を持つ住居は弥生中期の宮ノ台期の住居でも確認されている。横浜市折本西原遺跡13A住居などが代表例である。しかし、中期後葉では検出例が極わずかであり、時期が不明確なものも存在するため、本稿では後期に新出する要素として扱う。
- (6) 報告書ではY-4住居には主炉のみとされているが、Lの位置のピットから焼土が確認されているため炉と評価した。

参考文献

- 青木一男 ほか1999『松原遺跡 弥生・総論2 - 弥生中期・遺構図版 -』長野県埋蔵文化財センター
- 赤星直忠1931「考古二件 初聲竪穴群」『考古学雑誌』第21巻第2号 pp.77-80
- 石井 寛 ほか1980『折本西原遺跡』横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 石野博信1985「移住した人々の住居」『考古学と移住・移動』同志社大学考古学シリーズII pp.235-244
- 井上尚明1983「関東における後期弥生集落の様相」『研究紀要』第3号埼玉県埋蔵文化財調査事業団 pp.49-70
- 大木紳一郎1997「弥生時代の遺構と遺物」『南蛇井増光寺V』群馬県教育委員会 pp.680-726
- 岡本 勇・武井則道1969「朝光寺原式土器について」『昭和43年度横浜市埋蔵文化財調査報告書』同調査委員会 pp.70-74
- 岡本孝之1976「宮ノ台文化の意義」『神奈川考古』第1号神奈川考古同人会 pp.65-77
- 柿沼幹夫1982「吉ヶ谷式土器について」『土曜考古』第5号 pp.43-76
- 柿沼幹夫2015「北川谷遺跡群編年と岩鼻・吉ヶ谷式土器との編年比較対照」『列島東部における弥生後期の変革』西相模考古学研究会・西川修一・古屋紀之 pp.37-46
- 柿沼幹夫2016「頸胴部帯縄文甕 - 交差編年・地域間交流の鍵 -」『埼玉考古』第51号埼玉考古学会 pp.19-36
- 柿沼幹夫・佐藤幸恵・宮島秀夫2008「岩鼻式土器から吉ヶ谷式へ」『国史館考古学』第4号 pp.71-93
- 柿沼幹夫・宮島秀夫2010「岩鼻式土器から吉ヶ谷式土器へ その2」『埼玉考古』第45号埼玉考古学会 pp.33-38
- 甲本真之1975「弥生時代の社会」『古代史発掘 稲作の始まり』4 講談社 pp.87-98
- 小久保徹1977「弥生時代の大形住居について - 南関東地方の実態と諸様相 -」『埼玉考古』第17号 pp.23-42
- 小林行雄1933「先史考古学に於ける様式問題」『考古学』第4巻8号
- 小林行雄1938「弥生式文化」『日本文化史体系 1 原始文化』誠文堂新光社
- 小山岳夫2014「佐久地域後期弥生土器編年と北一本柳遺跡の年代」『佐久考古通信』第113号 pp.7-9
- 小山岳夫2016「吉田・箱清水と櫛」『長野県考古学会誌』第152号長野県考古学会 pp.1-14
- 近藤義郎1959「共同体と単位集団」『考古学研究』第6観第1号 考古学研究会 pp.13-20
- 笹森紀己子1985「久ヶ原式期の住居と集落」『古代探叢II』 pp.173-189
- 佐藤兼理2016「朝光寺原系住居」の成立 - 土器型式と住居構造の比較 -」『考古学集刊』第12号 pp.45-64

- 杉原荘介 1939 「北関東に於ける後期彌生式文化に就いて」『考古学』第10巻第10号 pp.528-536
- 杉原荘介 1940 「武蔵久ヶ原出土の彌生式土器に就いて」『考古学』第11巻第3号 pp.133-143
- 杉原荘介 1943 『原史学序論』葦牙書房
- 杉山浩平 2014 『弥生文化と海人集団』六一書房
- 関根孝夫 1974 「遺構についての考察」『諏訪原遺跡』松戸市教育委員会 pp.112-119
- 高木宏和・土井義行 1985 『釜台町上星川遺跡』武相考古学研究所
- 田村言行 1979 「弥生時代後期における南関東の動向 久ヶ原・弥生町を取巻く小文化圏」『どるめん』第23号 pp.65-77
- 田村良照 2013 「朝光寺原式の属性（後編）」『神奈川考古』第49号神奈川考古同人会 pp.1-42
- 田村良照 ほか 1997 『横浜市観福寺北遺跡群 関耕地遺跡 発掘調査報告書』観福寺北遺跡発掘調査団
- 都出比呂志 1989 『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
- 中村哲也 ほか 1997 『野庭町永作遺跡』野庭町永作遺跡発掘調査団
- 西岡秀雄 1940 「日吉台弥生式竪穴発掘報告『史学』第18巻第4号
- 浜田晋介 2000 「朝光原式土器・その存在の背景」『竹石健司先生・澤田大多郎先生還暦記念論文集』pp.73-92
- 平子順一・鹿島保宏 1989 『観福寺北遺跡・新羽貝塚』横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 古屋紀之ほか 2015 「付録1 東日本弥生時代後期～古墳時代前期広域土器編年並行関係表」『列島東部における弥生後期の変革』西相模考古学研究会・西川修一・古屋紀之 pp.430-431
- 古屋紀之 ほか 2009 『北川表の上遺跡』横浜市教育委員会・財団法人横浜市ふるさと歴史財団
- 古屋紀之 ほか 2011 『大原遺跡』横浜市教育委員会・財団法人横浜市ふるさと歴史財団
- 森本六爾・小林行雄 1939 『彌生式土器聚成』東京考古学会
- 松本完 1984 「弥生時代～古墳時代初頭の遺構と遺物について」『横浜市高速2号線埋蔵文化財発掘調査報告書 NO.6 遺跡 - IV 1983年度』同調査団 pp.71-131
- 村田文夫 2006 「竪穴住居から発掘される五平（状）柱に関する研究序論」『考古学の諸相Ⅱ』pp.951-966
- 若狭徹 2007 「古墳成立以前の北関東社会」『古墳時代の水利社会研究』学生社 pp.23-68
- 渡辺務 2008 「複数炉の性格について - 朝光寺原式を中心にした覚書 -」『国士舘考古学』第4号 pp.49-70

Pottery Types and Principle of Residential Plan in Yayoi Period Kanto, Eastern Japan

SATŌ Kenri

Previously, Japanese archaeologists specializing in the Yayoi Period of protohistoric Japan have a strong tendency to recognize a spatial distribution of a pottery type as the spatial extent of a particular human group in the southern Kantō region of eastern Japan. The author questions about the validity of this assumption. In order to test this assumption, the author investigates into the principle of residential plan of semi-subterranean structures.

In the Tama heights of southern Kantō in the late Yayoi Period (first and second centuries A.D.), the Chōkōjibara type pottery characterized by comb pattern originated from the Central Highlands of Japan distributed spatially. Within this spatial extent, archaeologists find semi-subterranean houses of a very characteristic structure, with a multiple number of fireplaces. The author refers to this type of semi-subterranean houses as the Chōkōjibara type residence. In the neighboring regions, such as northern Musashi (modern Saitama Prefecture, northern neighbor of Metropolitan Tokyo), Saku (southeastern Nagano Prefecture, western neighbor of Gumma), and Kamitsuke (modern Gumma Prefecture, northwest of Tokyo), where types of pottery with comb patterns characteristic of the Central Highlands of Japan were spatially distributed, the author finds semi-subterranean houses of a structure extremely similar to the Chōkōjibara type residence. These semi-subterranean houses are characterized by a multiple number of fireplaces and by characteristic layout of the fireplaces within a residence. I refer to this layout as the "Principle of L-LR Multiple Fireplaces," and considers this principle of residential plan widespread in regions where several types of pottery were distributed.

At the same time, all the settlement sites where the Chōkōjibara type pottery is discovered are not dominated by the Chōkōjibara type residences. Archaeologists find this type of residences in small numbers in the Miura peninsula where the Chōkōjibara type pottery is not distributed. Even after the Chōkōjibara type pottery disappeared, this type of residences persisted in the southern Kantō region.

The results of my analysis indicate that a pottery tradition is not necessarily correlated to the principle of residential plan. This means that pottery type alone is not enough to approach to prehistoric human groups.

Keywords: Late Yayoi Period of protohistoric Japan, southern Kantō of eastern Japan, human groups, semi-subterranean houses.